

# 現場での実践をもとに 知識や技術を習得し 質の高い認知症ケアを身につける

東京都昭島市を中心に特別養護老人ホームや養護老人ホーム、デイサービスなどを展開する社会福祉法人同胞互助会。1964年に開設した特別養護老人ホーム愛全園では、早くから赤星式音楽療法と呼ばれる認知症ケアに注力。利用者への認知症予防にはもちろん職員の人材育成にも活用している。(取材文/やまだおうむ)



丸山和代  
理事・園長

## ●施設データ

社会福祉法人同胞互助会  
特別養護老人ホーム愛全園  
[住所] 東京都昭島市田中町2丁目25番3号  
[TEL] 042-541-3100  
[URL] <http://doho-gojoyokai.com/>



## 認知症ケア エキスパートの育成ポイント3カ条

### ①法人理念と具体的行動指針を常に伝え続ける

(理念に対する愛情を持つことが大切)

### ②快眠、快食、快便、快感を徹底する

(利用者の睡眠、食事、排泄、医療の情報を徹底的に把握するところからよいケアが生まれる)

### ③役割を持たせる

(任せてみることで、責任感と仕事に対するやりがい、学ぶ意欲が生まれる)

## 特養で早期に 赤星式音楽療法を導入

東京都昭島市に1964年、都内第一号の特養としてオープンした社会福祉法人同胞互助会愛全園は、赤星式音楽療法(以下、赤星式)を早期に認知症療法として導入したことで知られる。赤星式は、作曲家の赤星建彦氏が心身障害者の身体的リハビリテーションのために考案。楽器演奏や歌を歌うこと(赤星式では「セッション」と呼ぶ)によりストレスの発散を促し、曲に合わせて身体を動かすことで残存機能の維持・強化をめざす療養音楽プログラムだ。同施設の丸山和代園長が導入の経緯について解説する。

「当法人の蓮村幸兌理事長は、79年に赤星先生と初めての出会いがありました。赤星語録のなかに『病はリズムを狂わせませす。音楽を利用して楽しく身体を動かしたり唄ったり楽器を演奏することは乱れたリズムの回復に役立ちます』という言葉があります。医師である理事長は、当時、この赤星式音楽療法を導入すると同時に、寝かせぎりの改善、おむつ外し、リハビリテーションの確立、そして生活のなかの医療を細やかに行うことに力を注ぎました。当法人の理念の一つでもある、快眠、快食、快便、快感の徹底です。よい介護をしていなければ特養での音楽療法は実現しません。音楽療法を導入することで

ケアの質も向上しました。そして以降、現在まで、毎週金曜日の14時からセッションを継続して行っています。今では、施設定員110人の内、80人が参加しています。また、当法人には、認知症対応型通所介護(定員36人)もあり、今ではそちらでも赤星式音楽療法を実施しています」

赤星式セッションは普及団体である公益財団法人東京ミュージック・ボランティア協会の音楽療法士が担当する。同施設では音楽療法士に指導を受けた専任の介護職がサポート役として加わり、マニュアルに沿って参加者の誘導等を行っている。介護職がサポート役としてセッションに参加することの意義について、丸山園長は次のように話す。



現場職員の声



和田光弘さん  
 主任ケアマネ(教育研修室委員)

「教えること=学ぶこと」  
 これにより横のつながりが生まれた

私どもの法人は高齢者に特化した事業所が8つと診療所があります。事業所ごとに専門職も多く研修の内容もさまざまですが、特養に内勤医がおり、以前から医師による医療研修、感染症研修や新人向けの研修を行ってきました。教育研修室ができたことで、内部で行っているエキスパートによる研修を体系化し、ポイント制を導入しました。また、外部研修で学んだ専門研修については、内部研修報告会で講師としてスタッフの教育を行ってもらっています。これにより、研修を受講したものの一人の学びとせず、皆に伝えます。教えるということは、真に自己の学びにつながります。今まで縦割り一辺倒の組織構造だった当法人に、横のつながりが出てきました。職員の人材育成や資質の向上のために今後も推進していきたいです。

「認知症高齢者が85%を占める当園では、現場で何が起こるかかわかりません。離床してフロアに来られる重度の利用者も少なくないですから、セッション開始後、体調が悪くなることも想定しておかなければいけません。また、セッション中にトイレに行きたい、居室に帰りたいという方もいます。セッションを円滑に進めるには、何か起きたときにその場で判断し最善の対応を行うことができる、利用者との力を不可欠です」

セッション導入以来使用しているマニュアルには、開始時の誘導の仕方や体調が悪くなった利用者などを退場させるかの手順など必要最低限の段取りしか記されていない。認知症高齢者の誘導には、細部まで行き届いたマニュアルは逆に足かせになるからだ。「大雑把なマニュアルを骨子に、介護スタッフが日々の業務から得た利用者一人ひとりの機能に関する知識で肉付けし、臨機応変に対応できるようにしています」と、丸山園長は言う。あくまで現場での実践をもとに知識や技術を習得していくのが、当園の人材育成の基本になっている。

若手スタッフたちの  
 学びの場としても積極活用

愛全園では、こうした赤星式セッションを若い介護スタッフたちの学びの場としても積極的に活用している。4人ほどで構成されるセッション担当スタッフの大半が20代の若手で構成されていて、メンバーも約2年で入れ替わる。セッション終了後には、毎回、専任スタッフが音楽療法士や医師である理事長とともにカンファレンスを行い、誘導の仕方やセッション時における利用者のポジション等についての改善点を皆で話し合う。次回のセッションをより効果的かつ効果的に行うためのものだが、各スタッフが自分の役割を客観的に見つめる場としても役立つという。

さらに、愛全園は赤星式音楽療法指導者養成研修指定施設であり、年1回の研修生受け入れの際は若手スタッフを司会進行として積極的に起用。「若い介護スタッフは、大抵引っ込み思案。でも、司会をやらせてみると、意外とうまい人が多い。檜舞台に立つことで、自身で気づいていない長所を引き出すことができる」からだそう。

日々の業務へのモチベーションにもつながっているという。

同胞互助会では人材育成のための新たな取り組みとして、2年前に「教育研修室」を法人内に発足。「教えることは最高の学びである」という理念のもと、法人内の管理職らの職員に対して外部研修を実施している。研修を受けた主任たちが今度は新人たちに対して自ら講師として講義を担当することで、専門知識をより深めていくという試みだ。「ゆくゆくは現在行っているポイント制を定着させ、赤星式音楽療法の教育など施設ごとの研修についても人事考課に反映させていき、法人全体の教育研修体系の構築をめざしていきたいと考えています」(丸山園長)



毎週金曜日に行われるセッション「フェニックス」の様子。若手職員の学びの場にもなっている。